

第2日(5月19日)

◇一般報告

12. 出生力の経済学—その方法的意義……………大淵 寛(中央大学)  
13. 江戸時代の人口思想……………石原 正令(関東学園大学)  
14. 十八世紀フランスの人口事情……………岡田 実(中央大学)  
15. 吉田顕三の寿命統計研究—聖運録—について(第2報)……………丸山 博  
16. 労働力人口の産業別配分の特性と問題点……………畑井 義隆(明治学院大学)  
17. 最適生涯貯蓄と最適人口成長……………高木 尚文(成城大学)  
18. 人口移動の転換と政策論的意義……………黒田 俊夫(日本大学)  
19. コーホートにおける地域的分布の変化の測定……………鈴木 啓祐(流通経済大学)  
20. 中国縦貫道開通に伴う人口の移動について……………飯谷 太一(川崎医科大学)  
21. 愛知県日間賀島東里の人口変動……………正木 基文(東京大学)  
22. 人口移動と頭脳流出……………岡田 真(駒沢大学)  
23. 姓氏の地域集積性および移動……………川上 理一(国立公衆衛生院)

◇会長講演

- 高齢人口の量と質……………曾田 長宗(国立公衆衛生院)

◇追悼講演

- 故岡崎文現元理事の逝去を悼む……………森田 優三(亜細亜大学)

◇共通テーマ報告「生命表とその利用に関する研究」(Ⅱ)

5. 初婚表(初婚の生命表)と結婚数の推計……………青木 尚雄(人口問題研究所)  
伊藤 達也(〃)  
山本千鶴子(〃)  
6. ラテンアメリカの大都市における結婚解消問題への生命表  
分析の応用……………尾中アルビンT(放射線影響研究所)  
7. 卒業生名簿からの死亡生残表の研究……………丸山 博  
8. 慶大医学部卒業生名簿による生命表……………川上 理一(国立公衆衛生院)  
9. わが国の将来人口推計—昭和53年安川推計—……………安川 正彬(慶応義塾大学)  
10. わが国の将来人口推計—日大推計について—……………黒田 俊夫(日本大学)  
大塚 友美(〃)

討 論

- 総 括……………重松 峻夫(福岡大学)  
(山口喜一記)

### 第37回人口問題審議会総会

「人口問題に関する重要事項について、関係各大臣の諮問に応じて調査審議し、及び関係各大臣に対し意見を述べること」(厚生省設置法第29条抜粋)を目的とし、厚生省の附属機関として設置されている標記審議会の第37回総会が、昭和54年7月6日、ホテル竹橋会館で開かれた。

まず新委員の紹介、会長互選のあと、山田会長挨拶、曾根田厚生事務次官挨拶、山口会長代理互選、第1・第2両部会員の指名、両部会長(黒田・山口委員)の互選が進められ、ついで最近の内外の人口情勢に関する報告とそれに対する質疑応答につづいて今後の運営について討論を行なった結果、とりあえず目下低下をつづけている出生力の動向を審議することを当面の課題と定め、審議会令第14条に基き、「出生力の動向に関する特別委員会」を新たに設置し、調査審議をすることになり、8名の委員(青井和夫、岩間一郎、黒

田俊夫、篠崎信男、松山栄吉、安川正彬、○山口正義、山本幹夫、50音順、以下同じ：○印委員長）、5名の専門委員（青木尚雄、岡崎陽一、河野穉果、濱英彦、村松稔）および事務局担当（新津官房企画室長、小林統計情報部人口動態統計課長）が指名された。（青木尚雄記）

## 1981年国際人口学会マニラ総会組織委員会第一回会議

1981年12月にマニラにおいて次回の国際人口学会総会（4年に1度）が開催されることになり、その組織委員会の第一回会合がマニラ市のフィリピン政府人口委員会の事務所で、1976年5月21日から23日までの3日間開かれた。

出席者すなわち組織委員会のメンバーはアルファベット順に列記すると、プリンストン大学の Ansley J. Coale 教授、フィリピン大学の Mercedes B. Concepcion 教授、ブラジルの Jose de Carvalho 氏、フィリピン人口委員会の Benjamin D. De Leon 氏、パキスタンの Sultan S. Hashmi 氏、ポーランドの Jerzy Holzer 氏、シリア人で現在国連西アジア経済委員会人口部所属の Nabil F. Khoury 氏、人口問題研究所の河野穉果、イタリアのフィレンツェ大学教授かつ国際人口学会理事長である Massimo Livi-Bacci 教授、フィリピンセンサス局長の Tito A. Mijares 氏、ベルギー人で国際人口学会事務局長である Bruno Remiche 氏、国連人口基金事務次長でパキスタン人の Nafis Sadik 女史、セネガルの Landing Savane 氏、国連人口部長 Leon Tabah 氏、そしてフランス国立人口研究所の Georges Tapinos 氏である。互選により、議長は Concepcion 女史、副議長に Holzer 氏が選出された。

議題としては次回マニラ総会の日程、会議でどのような部会（セッション）を設け、誰を組織者にし、そしていかにして資金を集めるかということが主要な項目であるが、その中でもどのような部会を設けるか、又誰を組織者（オーガナイザー）とするかが95%の時間を費して論議された議題であった。45に及ぶ部会が選択されそれに見合う組織者の名前が選出された。

ほとんどの部会は3つ及至4つのセッションが同時に進行する並列方式であるが二つだけ特別部会があり、これはその時点ただ一つだけ開かれる Plenary session といわれるものである。これは、一つは「最近の世界人口のレベルと趨勢（出生率、死亡率、人口移動について）の評価」であり、もう一つはそれぞれ部会に提出されたペーパーの総合的概観である。第二の題目はあまり特殊なものとはいえないので、第一の題目が1981年国際人口学会総会のハイライトとなるわけである。（河野穉果記）

## 故岡崎文規元人口問題研究所長を悼む

本年5月8日午前7時20分 元人口問題研究所長、岡崎文規先生が死去され享年84歳であった。

謹んで哀悼の意を表する次第であるが、先生が研究所長をやめられたのは昭和34年4月であった。その後、日本社会事業大学、竜谷大学の教授を歴任し昭和41年4月には勲二等瑞宝章を受けられている。

研究業績については数多く、一般論的人口問題の研究から、さらに人口の資質に関係ありと思われる「自殺問題」「結婚と家族問題」までに及んでおり、かなり幅広い視野をもっていた。人口問題研究所で第1回の出産力調査を行なったのも先生であった。昭和14年から34年にかけて20年の長きにわたって人口問題研究に寄与して頂いたわけであるが、もう一つ特筆すべきことは戦前はすべて事務次官が研究所長となっていたが戦後始めて研究者の所長となりこの意味では第1代目の所長とも言えることである。終戦後占領治下の人口問題研究にはかなり苦勞したと思われる。「苦悶の人口」という著書もその頃であった。私が昭和18年人口民族部と言われた時、部長であった先生と始めて研究的に接触したのは「平均の理論と応用」という